審 査 の 結 果 の 要 旨

氏　　名　　小 島 見 和

本論文は、建築史学はもとより歴史学においてもこれまであまり深く研究されてこなかった、南仏ラングドック地方の家畜放牧という現象に着目することで、共同体の領域構造の歴史を明らかにすることを目的とした都市史・領域史研究である。限定された都市空間のみならず、その外側の範囲・空間に拡がる領域に研究対象を拡げ、その具体的な領域を資料に基づき実証的に論じることを可能にした画期的な研究といえる。

本論は「序章」「第一部」「第二部」「結論」からなり、巻末に「補論」「史料と参考文献」「図表一覧」を加えた構成となっている。第一部は南仏の放牧問題の全体像をまとめたものであり「第一章」〜「第三章」が含まれ、第二部はその放牧問題の実態を資料に基づき具体的に論じたもので、「第四章」〜「第八章」が含まれる。以下、各章の内容を概観する。

「序章」では、家畜放牧に着眼して領域史を研究する上ことが、都市史・領域史研究にどのように寄与することが可能か、また同時に日仏・日欧比較史への発展可能性などが論じられる。また本論における研究対象となる地域の定義と時代設定、さらに本研究で用いられる史料と方法について詳述される。またフランス農村史分野における先行研究、日本における牧畜に関する先行研究や、日仏における西欧中近世の紛争論や慣習法に関する先行研究、さらに中世末から近世にかけての絵図研究などの先行研究を概観した上で、本研究の独自性が四点にまとめられた。第一に都市史研究として家畜放牧に着眼することの新規性、第二に放牧を共同体の問題として論じることの新規性、第三にフランス近世を対象とした農村史研究が多くないこと、第四に扱われる絵図史料の新規性があげられる。

第一章は、ラングドック地方における放牧問題を広域に捉え、その地理的分布を明らかにする章である。トゥールーズ高等法院文書における民事判決のなかから放牧に関係する事案が網羅的に採りあげられ、それぞれ地理的特徴に応じて 9 つのグループに分類された。山岳地帯では牧畜は第一の産業であり、また沿岸地方の堆積平野では耕作と家畜放牧の両立が問題となっており、それぞれ

の地域特性に応じて、牧畜紛争の地理的な特徴が明らかにされた。

第二章は牧畜紛争の主体と、紛争の具体的な内容の全体像を明らかにする章である。トゥールーズ高等法院文書によって明らかになる紛争の当事者として、国王またはその代理人、共同体と領主、共同体と共同体、あるいは共同体内部の個人など、さまざまなケースが明らかにされた。さらにそこでの具体的な紛争の内容として、放牧する場所の問題、また放牧に関する権利や規則、罰則など、「牧畜紛争」の内実が明らかにされた。

第三章は 16 世紀から 18 世紀にかけて、放牧問題がどのように変化していったのか、その通時的分析に関する章である。全体的に 17 世紀後半以降、トゥールーズ高等法院で扱われた放牧問題の件数は激減する。史料の分析から明らかになったこの事実をもとに、本研究では 16 世紀から 17 世紀前半を放牧問題の記録が増加した時期、17 世紀後半から 18 世紀を放牧問題の記録が減少した時期と、前期後期に大別し、それぞれの時期の社会的背景について論じた。

第四章から第八章は、具体的な都市と領域を扱って分析する第二部となる。

第四章は、第二部で扱われるアルビジョワ地方とナルボネ地方の、地理的な枠組みを詳述する章である。中世末期から近世にかけての社会、政治、経済、人口、土地利用、そして家畜の存在など、多面的な角度からその状況が詳述された。

第五章は、紛争と史料としての絵図に関する章である。領域史研究の方法として絵図に着眼することは、本研究の最も重要な独自性を示す点といえる。本章では、こうした司法絵図がどのように作成され、どのように用いられたのか、その定義などについて、具体的な絵図を採り上げながら論じられた。

第六章は、具体的にアルビの領域紛争を、絵図史料に基づいて論じた章である。ここでは特権文書、行政文書、司法文書などの文字史料の悉皆的な調査に加えて、14 世紀に作成された絵図を史料として用いながら、アルビにおいてどのような放牧問題にもとづく領域紛争があったのか、さらに現代の地図に照らし合わせて、そこで争われた領域がいかなる範囲に拡がるものだったのかが明らかにされた。

第七章では、同様にナルボンヌの領域紛争を、絵図史料に基づいて論じた章である。ここでもナルボンヌ市がかかわった放牧紛争に関する文字史料を悉皆的に調査した上で、16 世紀に作成された絵図史料に基づいて、ナルボンヌの放牧問題とその領域紛争について詳細に論じられた。ここでは絵図に描かれた文字情報や図で表された情報を緻密に分析し、その紛争の具体的な内容や領域の範囲などが、驚くほど詳細に論じられている。

第八章では、第七章で論じられたナルボンヌの周辺領域における複層的な放牧領域の実態を明らかにした章である。特に「デックス」と呼ばれる領域の存在を明らかにし、その範囲や、それがどのように機能する領域だったのかを明らか

にした点は、重要である。
　結章では、以上で論じられてきた南仏の放牧問題に関する研究から明らかにされた共同体領域と家畜放牧の関係性、その領域の認識や複層性の意味についてまとめられ、本論の結論となっている。

　以上のように、本論は膨大かつ精緻な資料調査にもとづき、牧畜というきわめてユニークな視点から領域史の問題に迫ったものであり、都市史・建築史分野の研究としてきわめて重要な成果をあげたものである。
　　よって本論文は博士（工学）の学位請求論文として合格と認められる。

以　上